

# 植物研究の道から素朴な芸術フォークアートへ

## 津軽の農村ほろふじと

植物研究の道から、フォークアートの道に入った異色の米国人芸術家トレイ・テイラーさん(43)が、5月3日から青森市で個展を開く。10年ほど前に3年間、青森で暮らしたことが縁で、創作と個展のための滞在地に青森を選んだ。フォークアートは様々な素材にペインティングなどを施す素朴な芸術で、米国南部で盛ん。テイラーさんの創作歴はまだ2年だが、その作品には、かつて感動を受けた津軽の農村風景や、板画家・棟方志功をほうほうとさせる色彩が息づいているとの声もある。



テイラーさんは米国南部のアラバマ州出身で、カリフォルニア州在住。大学の研究機関で南米などの薬草を採取し、効能を探る研究をしていた。

フォークアートとの出会いは2年前。人間関係で悩んでいたところに、休暇で帰省し、友だちとドライブをした。アラバマはフォークアートの拠点だ。作品の数々を見て回っている時に「気晴らしに描いてみれば」と勧められた。

家族に芸術家が多かったものの、テイラーさん自身はアートとは無縁。だが、気持ちをやすためにと始めた創作にのめり込んだ。

個展を控えて作品の仕上げに熱を入れるトレイ・テイラーさん。青森市千富町で

## 米国人の作家が 来月青森で個展

辞めた。今は創作活動に専念している。

青森との縁は、英会話教室の教師として来県した10年ほど前。3年間、青森市内で生活した。当時、小学生だった娘とともに暮らし、津軽の農村集落を歩いて回った思い出の地だ。

再訪となる今回は、2月半ばから谷地温泉や友人の写真家福士輝子さん宅に泊まり込み、湯治場のおぼあちゃんたちをモチーフにした絵などに取り組んでいる。

大小の板切れや布袋、ガラス瓶、和紙にペンキで描く。何の変哲もない素材が、テイラーさんの手に掛かると素材で優しい表情に生まれ変わる。日本の友人からは「棟方志功の版面に通じる色彩だ」と言われた。

テイラーさんは「描く時は、神が私の手に乗り移っているようなミス터리アスは気持ちになりにます。青森にはアラバマに通じる田舎の風景があり、懐かしさを感じます」と言う。

毎日、研究が終わると自宅に走って帰り、そこから中の板切れを集めて描き続けた。友人らの目に留まり、徐々に人気が出た。米国で数回の個展を開いたほか、小説の表紙絵にも採用された。昨年6月に研究活動は

個展は5月3日から8日まで。青森市新町2丁目のギャラリー「あるち」で開かれる。